

名古屋の戦災

来月、名古屋市高年大学鯉城学園で話すことになっており、いろいろ準備している、講義のテーマは「名古屋のまちづくりと都市魅力」である。現役時代の講義をベースにして、退職後の「成果」を活かそうと考えている。

戦後名古屋のまちづくりにとって、その出発点が戦災であり、その後の戦災復興事業である。写真は「昭和 22 年 名古屋市戦災焼失区域図」である。昭和 20 年(1945)の終戦時点に作成された。名古屋都市センター編『名古屋都市計画史(大正 8 年~昭和 44 年) 図集編』に収録されている。

解説によると、名古屋市が受けた空襲は昭和 19 年 12 月から 20 年 7 月の間に計 38 回におよび、そのうち機数 40 機以上の大空襲は 16 回を数えた。これらの空襲により、全市域約 1 万 6000ha の約 24% にあたる約 3850ha が灰燼に帰し、特に東・中・栄・熱田の各区は、その区域の 50~60%が焼失した。

本格的な空襲は、東区にあった三菱発動機工場に対する B29 爆撃機 70 機による爆撃であった。その後の地域爆撃は、主として焼夷弾により夜間空襲という形で行われ、都心部の公共建物や繁華街は壊滅的な打撃を受け、市の中心部は焦土と化した。

現役の頃に現代都市問題などの講義において、復刻版「戦災焼失区域図」(日地出帆、昭和 60 年)を資料としてよく使った。戦後名古屋のまちづくりを考えるうえで、その出発点となるからだ。その付属資料として、名古屋空襲を記録する会作成の「名古屋空襲一覧」がある。B29 が 440 機来襲、投下爆弾数 3344 トンが最大であり、攻撃目標としては三菱発動機大幸工場(いまのナゴヤドームあたり)・南部の大江工場や市街地中心部が多くなっている。それは地図の赤く表示されたところに一致する。名古屋の南北が赤くなっている。

2013 年に吉田一彦さんと共同で編集した『名古屋の観光力』風媒社において、担当章で次のように書いた。「名古屋が都市としての個性と魅力に欠けるのは、戦争により歴史的遺産と景観が豊富な市街地の大半が焼失したことが大きく影響している。それと戦後の戦災復興事業により、機能的・効率的なまちづくりが推進されてきたことによる。」都市魅力を大都市名古屋のまちづくりから検証する講義では、こうした戦災についてもふれてみたい。

(2014 年 11 月 22 日)

